

発刊に寄せて

大学教育・学生支援機構長 林 邦彦

昨年は、本学の起源である小学校教員伝習所が明治6年（1873年）に開設されて150年となる「創基150周年」でした。また、今年は、昭和24年（1949年）に国立学校設置法に基づいて、群馬師範学校、群馬青年師範学校、前橋医科大学、桐生工業専門学校を包括して、群馬大学が開学されて75年となる「開学75周年」です。このような節目に大学教育・学生支援機構は組織改編を行い、大学教育センター、グローバルイニシアチブセンター、学生支援センター、アドミッションセンター、健康支援総合センター、教育改革推進室の6つのセンター・室から構成される教育研究組織となりました。

これにともない、旧国際センター論集を引き継いで、新たに大学教育・学生支援機構論集「ロゴス」を発刊する運びとなりました。論集名の「ロゴス logos」は、ギリシア語 λόγος が語源とされ、理性、論理などと訳されています。私の専門は疫学 epidemiology ですが、疫学の最初の講義では、まず epi-demiology と分解し、epi（ギリシア語）は upon（英語）〜について（日本語）、demos（ギリシア語）は people（英語）人々（日本語）、logos（ギリシア語）は study（英語）理（日本語）なので、「『疫学とは人集団についての理』」と「ロゴス」の語を使って説明しています。また、「ロゴス」の語を聞くと、いつもバチカンのローマ教皇庁にあるラファエロ・サンティによるフレスコ画「アテナイの学堂」が思い浮かびます。御存知のように、この絵にはプラトン、アリストテレスをはじめ数多くの古代ギリシア哲学者たちが学堂に集う姿が描かれています。「ロゴス」を世界の原理とした哲学者ヘラクレイトスも肘をついて一番前に陣取っています。

知の結集の象徴となる名をもつ本論集の発刊は、群馬大学の歴史にあらたなページを加えるものと思います。機構に所属する常勤・非常勤の教員が日頃の研究成果を発表する知的交流の場ができたことは、大学にとって大きな意義があります。確実な査読のもと、人文科学・自然科学・社会科学・応用科学などの垣根を越えて、さまざまな学問領域から集まる上質の論文を社会に向けて発信することが期待されます。本機構集「ロゴス」も、いずれは「群馬の学堂」の象徴となることを願ってやみません。

本機構論集が創刊できたのは、大学教育センター 渡辺秀司センター長、グローバルイニシアチブセンター 飯島睦美センター長をはじめ、機構論集第1号編集委員の牧原功先生、高波幸代先生、Raymond B. Hoogenboom 先生、大和啓子先生らの御尽力の賜物です。群馬大学 大学教育・学生支援機構論集「ロゴス」が読者の皆様にとって、良質の知的交流の場「群馬の学堂」となるべく、機構の構成員一同、努力してゆきたいと思っております。